

新 世界洋上紀行

洗練のヨットスタイルを愉しむラグジュアリーな海の旅

第4回

SAGA RUBY(サガルビー)／前編

英国客船「サガルビー」で巡る
イギリス・アイルランド周遊～アイスランドへ向かう旅

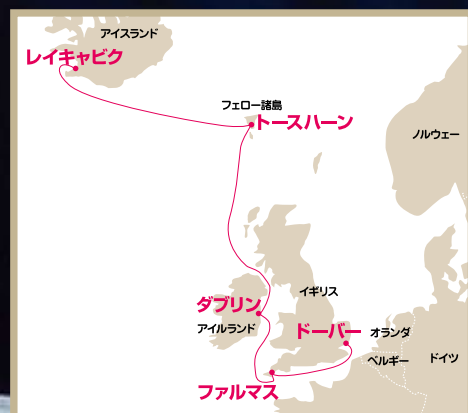
かつて、オーシャンライナーと呼ばれる船があった。例えば、来年あの悲劇から100年を迎えるタイタニックは、まだ航空機が飛んでいなかった時代にイギリスとニューヨークを最短時間で結ぶために、英国のホワイトスターライン社が建造した当時最速の客船だった。レジャーのためのクルーズ船ではなく、目的地に少しでも早く着くための遠洋航路船、そういった船をオーシャンライナーと呼んだ。今回からは、かつてオーシャンライナーとして活躍し、今はクルーズ運行され、そのクラシックなスタイルが愛されている英国のSAGA RUBY(サガルビー)を3回にわたって紹介しよう。

text&photo: Masaaki Higashiyama

special thanks: SAGA

Mercury Travel

<http://www.mercury-travel.com>



美しきオーシャンライナー 客船黄金期最後のクラシックスタイル

ブリティッシュウェザーという言葉がある。イギリスは曇りの日が多く、イギリス人がやや自虐的に、「まあ、いつものブリティッシュウェザーですよ」とかいった感じでこの言葉を使う。ロンドン・ガトウィック空港はどんよりとした曇り空。8月なのにやや肌寒い。やっぱりブリティッシュウェザーのお出迎えだった。

その昔、ノルウェー・ジャンアメリカラインという船会社があった。その名の通り、ノルウェーとアメリカを結ぶオーシャンライナーを運航する会社で、1973年に建造したのが今回乗船する「サガルビー」である。当時「ビスタフィヨルド」という名前で就航。北欧の高級客船ということで、たちまち世界中の客船ファンの間で話題となった。その後イギリスのキュナードなど名門船会社を渡り歩き、現在、英国船社サガクルーズのフリートとして現役で活躍している。エレガントな細身の船体に、外洋航海時の快適な乗り心地を約束する深い喫水を持つ「サガルビー」。往時の船旅を今に伝える、クラシックスタイルのオーシャンライナーである。

8月4日 ロンドン～ドーバー

ガトウィックから東へ車で走ること約2時間で、ドーバー港へ到着。古く歴史ある建物を上手く使ったいかにもイギリスらしいクルーズターミナルにサガルビーの美しい姿はあった。

鋭角にとがった細く長い船首。波を切り分けて速く走るためのそ

れは、まさにオーシャンライナーの風格。シアーの効いた濃紺色の船体は曇り空の下でさらに深みを増し、いっそうの鋭さをみせる。

静かに出港の時を待つサガルビー。パスポートとクルーズチケットを提示し、部屋のカードキーを受け取り、キャングウェイを渡り、いざ乗船。クルーがさっと荷物を受け取り、部屋へと案内してくれる。

北欧の客船らしく美しい明るめのウッドパネルに包まれた螺旋階段を上がり、船首方向へ向かう。部屋の扉を開けると、温かみのある木の大きなテーブルに、書棚、ふんわりとしたシーツに包まれた大きめのベッド。やわらかなベージュのカーペットが敷き詰められたキャビンは、どこか安心感がある。ここがこれから我が家となる。まずは旅装を解き、デッキに出てみる。

上質なチークで敷き詰められたプロムナードデッキを歩く。「この質感最高だなぁ、この船本物だなぁ!」と再認識。昨年、この船で大西洋のマデイラ諸島まで乗ったときの感覚が蘇ってきた。見渡すとドーバーの海は少し白波が立っている。今日は少し覚悟しといたほうがいいのかもしい……。

午後3時、ボールルームで行われているアフタヌーンティーに向く。紅茶とスコーン、サンドウィッチなどなど。クルーズの料金に

はすべての食事代が含まれており、こういったアフタヌーンティーやルームサービスも当然無料だ。海を走る優雅なクラシックホテル。寝て起きたら次の目的地に着いている。クルーズとは極めて優れたレジャーであり、世界中で飛躍的にクルーズ人口が増えているのもうなずける。

夕刻、再びデッキに出てみる。雲が切れだした。白波も収まってきた。定刻より2時間遅れの午後7時、サガルビーは北極圏の国アイスランドへ向け、ドーバーを出港した。

昔も今も、洋上の最大の楽しみは、食べること。毎晩贅沢なメニューを堪能できるのが船旅の醍醐味だ。今宵もメインダイニングへ向かう。サガルビーのダイニングは全船客(約660人)が一同に食事できる広さを誇る。

最近のクルーズ船は船客が2,000人を超えているため、1回では食事ができず、2回制をとる。1回目は午後6時から、2回目は午後8時からといった感じで、1回目の人は会話が弾んで時間が長くなると、せきたてられることとなる。サガルビーにはそれが無い。ゆったりと食事ができる。1回制をワンシーティングと呼ぶが、これは当時、名船の証だった。

私のディナーテーブルに懐かしい顔のウェイターが待っていていた。フィリピン人のマノーロ。昨年マデイラ諸島へのクルーズで大変世話になった。彼は非常に優秀で、6人ぐらいのテーブルなら、初日で船客の好みを把握してしまい、次の日からは何も言わなくても、食後の飲み物などコーヒー、紅茶、ハーブティーなどをそれぞれの船客にサーブしてくれる。あまりあれやこれやと世話をされるのは疲れるのだが、程よい距離感で気を利かしてくれるようなサービスはなんとも心地よいものだ。船旅の良し悪しはハードの立派さだけでなく、こういったサービス面がととても大切なのである。

新鮮な食材の前菜、船らしい多彩なバリエーションの温かいスープ、そして絶妙な焼き加減のプライムリブ(ローストビーフの厚切り)と、心のこもったメニューが船客を魅了する。イギリスには美味しいものがないと言われるが、英国客船サガルビーのディナーでは心配は不要。肉・魚料理ともにバリエーションがととても豊富で、その味は他の船と比較してもかなりグレードが高い。ワインも手ごろな価格から超ビンテージものまで、多彩なバリエーションがストックされている。ボトル全部飲みきれなければ、次の日までストックしておいてくれる。そして、何度も言うが、ウェイターのサービスが本当に素晴らしい。



ディナーの後は、メインシアターでのショーを見に行ったり、バーで一杯やったり、船には極上の大人の嗜みが用意されている。ちなみにこの船には子供は乗っていない。それは45歳以上という年齢制限があるからだ。もちろんWiFiも繋がらない。ここはひとつ、携帯電話から離れ、時計をはずして、個人の時間を楽しむことに興じようじゃないか。聞いた話だが、アランドロン別荘には時計がないらしい。そう、そんな感じだ……。

8/5 終日航海日

朝7時、目覚めの紅茶が部屋に運ばれてくる。そして今日の天気を説明してくれる。これは昔から続く英国船社ならではの慣習。今やこんな悠長なサービスしてくれる船会社はほとんどなくなってしまった。

朝食はビュッフェレストラン、リドへ。リドは船尾のプールデッキに繋がっているの、その日の気分でも外でも食べられる。

グレープフルーツとイチゴにスイカ、スモークサーモン、スクランブルエッグにハム、トースト。飲み物はトマトジュースと紅茶。スクランブルエッグなんてさして珍し

くもないが、こういっただこでも食べられるメニューほど味に差が出るものだ。パサパサで全然駄目だっ

たり、ミディアムレアで絶妙な焼き具合だったり。サガルビーのそれは言うことなしである。

今日は、終日航海日。イギリスらしからぬ快晴ですすでにデッキチェアで日光浴を楽しんでいる人もいる。私は終日航海日にこそ、船旅の醍醐味があると思っている。一日海の上、船上では多彩な催しが用意されており、どれに参加しても良いし、はたまた何もしなくても良い。私の場合、少々ダサイが日本から持ってきた週刊新潮を生ビール片手にデッキで読む。普段横浜で週末にやっていることなのだが、そんな「どこでもできるじゃないか」というようなことを洋上でやっているときに、すごく贅沢な気分になれる。

そして、今夜のドレスコードはフォーマル。昨年のサガクルーズでは私以外のイギリス紳士はすべてタキシード。それを知っていたので今年是用意してきた。シャツは立った襟ではなくオーソドックスなワイシャツタイプ、カマーバンドやオペラバンドは着けない。色はもちろん黒。

イギリス紳士のタキシードは着飾るお洒落というよりは、普通に身についている身だしなみという感じである。最近のクルーズ船はドレスコードが緩くなり、タキシードじゃなくてもスーツ&ネクタイでOK、船会社によってはジャケットぐらい着ていればOKという会社もある。しかし私は、船旅はきちっとフォーマルがあった方が良いと思う。フォーマルで食事をしたり、パーティーに出かけたり、そんなことは普段の生活ではあまりないことだろう。船旅は非日常の憧れの空間だからこそ価値があるわけで、私もそれを楽しんでいきたいと思っている。



陽が落ちると、大きなボールルームでキャプテン主催のウェルカムパーティーが始まる。入り口でキャプテンとの記念撮影。シャンパングラスを受け取って華やかなボールルームのソファに腰掛ける。軽快なジャズの生演奏に、ダンスを楽しむ方々も。やがてキャプテンが上級クルーを壇上で紹介し、乾杯の後ディナーへ流れる。長年洋上で繰り返されてきた、トラディショナルなクルーズのワンシーンである。

ディナーの後は、大好きなサウスケープバーへ。ゆったりとした椅子に座り、本場のスコッチで一杯やる。同行の諸氏と船談義、特に古い船の話に華が咲く。今よりももっと、船旅が遠い存在だった時代があった。外国客船、それは外から眺めるだけのものであって、乗るものではなかった時代。そんな話に、夜は更けていく……。

8/6 ファルマス (イギリス)

最初の寄港地、ファルマスへ到着。イギリスの南西の端に位置し、コーンウォールと呼ばれる地域で、独自の文化、言語を持つ人たちが今も暮らしている。

サガルビーは沖合いに停泊。港は空いているように見えるのだが、なぜか沖留まり。クルーにわけを尋ねると、サガルビーの喫水が深すぎて接岸できないらしい。これもオーシャンライナーの風格、ということか。

気温16度、小雨。8月にしては肌寒い。リドで軽く朝食を済ませ、8時にテンダーボートで下船。入り江にかわいい建物が並ぶ様子は、色合いは違うがポルトフィーノを思い起こさせる。

バスで走ること1時間半、エデンプロジェクトという植物園に到着。



温室の中で地中海や亜熱帯の気候を再現し、現地と同じ植物が生長している。庭園に対する英国国民の関心の高さを垣間見た気がした。

帰りのテンダーに乗ると、レガッタが始まっており、サガルビーは無数のセールボートに囲まれていた。

午後2時、遅いランチを摂りにリドへ。メニューを見ると「マドラス・チキン」とある。「もしや!」…予感は大当たった。カレーだった。サガルビー、いやイギリスのカレーは本当に美味しい。無駄に辛くなく、味わいがある。チャツネを少しつけて食べる本格的なインドカレーだ。サガルビーのカレーの美味さを知っている私は、思わず嬉しくなり、いつもより少し多めに盛り付けてもらった。

穏やかな夕刻、サガルビーは次の寄港地、アイルランドのダブリンに向け出港した。 **P.B.**

Profile

東山真明

海と船の旅をこよなく愛する、海外クルーズエージェント。大型客船よりも、プライベート感ある上質な「ヨットスタイル」のクルーズにこだわり、国内で小型船クルーズを取り扱う4社による「スモールシップ アライアンス」に加盟、その啓蒙に励む。マーキュリートラベル代表。

■マーキュリートラベル TEL: 045-664-4268

<http://www.mercury-travel.com>